



2013年5月22日放送

漢方を理解するための10処方

日本漢方振興会漢方三考塾 講師 高山 宏世

(1) はじめに

漢方処方の勉強を始めたいが、漢方の処方には馴染みの無い漢文で書かれている上、薬の作用や機能も漢方の医学理論に基いているので解り難いという声をよく耳にします。そこでこれから「漢方を理解するための10処方」と題して毎回10の基本処方から1処方を選び、その内容や使い方だけでなく、漢方を理解する上で是非知っておきたい事柄などを処方と関連させながら、11回に亘り順番にお話ししたいと思います。10処方という数は1単位の学習や応用には丁度手頃な数ではないかと思うので、先ず今回10の基本処方を選んでみました。

現在わが国で漢方治療に常用されている処方は約250処方、その中で漢方エキス製剤が製造されて健康保険にも薬価収載されているのは148処方、漢方薬の材料として常用されている生薬は200種類くらいです。その中から10処方を選び出すとなると、その選び方の基準はいろいろ有ると思います。ここではこれからの漢方診療で大いに役立つことは勿論、知らないでは済まされない大切な処方、またこれらの処方を学習する中で漢方の考え方や決まりが自然に身に付くようにと願って選んだ結果、10処方は次のような条件に沿うものになりました。

1) 先ず、漢方治療全体の中で重要性が高く頻繁に用いられている処方、外感病と内傷雑病、気・血・水や五臓などを考慮した上で代表的な処方を選びました。

漢方薬は病人の体内で生じている異変、即ち「証」によって毎回処方が決まります。従って病気が同じでも原因が異なればそれぞれ証に応じて処方が異なる「同病異治」や逆に異なった病名が付いていても証が共通していれば同じ処方を用いる「異病同治」ということが頻繁に行なわれます。選ばれた10処方は当然日常頻繁に用いられる機会も多い処方です。

2) 次に、使い易くよく効く処方。不快反応や副作用が滅多に無い処方。

こう云った処方通常服み易く、時に「漢方薬は本当によく効くナ」と実感させてくれ、副作用も少なく安心して使えるものです。

3) 処方の内容がスッキリしていて分り易く、名前も中味も覚え易い処方であることも必要です。

このような処方は加減方や合方も多く作られていて、他の処方を理解する上でも良い助けになります。

このような条件を満たすのは皆、既に古今の名処方とされている処方ばかりですが、ここでは

①葛根湯、②麻杏甘石湯、③小柴胡湯、④補中益気湯⑤桂枝茯苓丸、⑥五苓散、⑦真武湯、⑧小建中湯、⑨八味地黄丸、⑩大黃甘草湯、の10処方を選びました。

4番目の補中益気湯を除く9処方が漢方医学の原典とされる『傷寒論』及び『金匱要略』に出てくる古方と呼ばれる処方でも占められました。矢張り傷寒・金匱は漢方の出発点であり、その中の名処方は世に出て2000年以上経つ現在でも頻繁に用いられると共に、衆方の祖として後世の処方の土台となっているので、それはむしろ当然のことと言えます。

最初にこれらの10処方をマスターしたら、次はその知識と経験を基礎にして、興味の湧く処方や必要に迫られた新しい処方を学習し、活用できる処方の輪を次第に広げて行けば良いのです。当面は常用できる処方数を40から50位にまで殖やしていけば日常診療には大体対応できます。学習した処方はただ頭の中にしまって置くのではなく、直ちに実際に使ってみることが大切です。使ってみてその結果を実感するところから次の新しい知識や理解が得られて、次第に実力が向上して行きます。

一つ一つの処方を完全に理解し活用するには次のような順序で学習すると良いでしょう。

先ずその処方はどのような性質と働きを持っているか。

漢方には「寒ナル者ハ之ヲ温メ、熱ナル者ハ之ヲ寒セヨ」という寒熱の治療原則があり、漢方薬は総て温熱剤と寒涼剤に分類されています。

次に「実ナル者は之ヲ瀉シ、虚スル者ハ之ヲ補ウ」という補瀉の治療原則があります。実とは病邪が充満して旺盛な状態で治療はその邪を排除或は疎通させます。之を瀉剤といい、瀉剤を用いるべき状況が実証です。逆に虚とは病邪に対しそれを排除する正気が病人

側に不足して病気が治せない状態で、それを治す為には薬で正気を補ってやります。之を補剤といい、補剤を用いるべき状況が虚証です。言い換えると、瀉剤は攻めの治療、補剤は守りの治療と云えます。

漢方薬はその処方が温熱剤か寒涼剤か、また瀉剤か補剤か、性質に4通りの組み合わせが出来るので、どの範疇に属す処方か先ず確認しておかなくてはなりません。漢方治療は寒温補瀉の原理を理解して使い別けることが基本の第一歩です。

次の段階でその処方がどのような状況即ち「証」に対して具体的にどのような働きをするのか、即ちその機能を理解します。これを「方証相対」といい、処方が正しく方証相対していればその薬は能く効きます。

処方の性質機能が分ったらその処方の成り立ち、即ち原典の記載を確認します。漢方薬は代々受け継がれる間にその方証は整理拡大され若干変化していますが、原典を読むことがその処方を正しく理解する早道です。

漢方処方を形成する生薬は皆、寒温補瀉の性質と、辛・苦・酸・甘・鹹の5味があり、それぞれが特有の薬効を現わします。

次の段階ではその処方がどのような性質と働きを持った生薬で構成されているかを学習します。

漢方薬の処方には皆、異なる役目を持つ君薬、臣薬、佐薬、使薬という4種の生薬で構成されています。君薬は主君の君で一処方の中心を為しその処方の効能や性質を決定付ける最も重要な生薬です。次に臣薬は大臣の臣で君薬の機能を助けて処方の機能を増強する生薬です。佐薬の佐は補佐の佐で処方の中に在っては君薬と臣薬が現す薬効をさらに増強したり、或は副作用の出現を防止します。処方は佐薬の配合の巧拙で処方全体の優劣が大きく分かれると言われる程重要な意味を持っています。最後の使薬は使いの使で処方の中の薬同志を調和させ、全体の味や性質を調整して服用し易くしたり、あるいは引経薬といって薬効を病巣部に誘導したり、いろいろな実際面で処方の働きをサポートします。ただ処方中の各生薬が単なる性質や薬効だけでなく、君臣佐使の中でどのような役割を担っているか迄理解すれば、処方の学習は大いに進歩したといえます。

以上の事柄が理解できればその処方が臨床でどのような病気や症状に応用できるか、また他の処方との鑑別なども自ずと理解され処方を完全に自分自身のものにできるでしょう。